



ラオス・クリーン農業開発プロジェクト

クリーン農業ニュースレター

第11号 2021年1月発行

このプロジェクトは5年間（2017-2022）の JICA による技術協力プロジェクトで、ビエンチャン市、ルアンパバーン県、サイヤブリ県及びシェンクワン県の4つのパイロット県を対象としています。プロジェクトは、パイロット県における市場ニーズに基づくクリーン農業（有機農業及び GAP）の推進を目的として活動しています。

最近のトピックス

1. PMU 会議の開催

1月14日、サイヤブリ県にてコロナ禍により延期されていたプロジェクト・マネージメントユニット（PMU）会議を、対象4県による初の合同 PMU 会議として開催しました。会議へはプロジェクトマネージャーをはじめとする CASC カウンターパート・チーム、各県の農林局次長、農業課課長と職員、JICA ラオス事務所からプロジェクト担当者の総勢30名が出席しました。当日は10℃前後の冷え込みにも負けず、各県とも活動進捗、成果・課題及び今後の活動計画案について熱のこもった発表を行いました。その後、JICA 専門家がプロジェクトデザインマトリックス（PDM）改訂案と、これに基づく2021年の活動方針に関する説明を行いました。特に、改訂 PDM 案で整理されたアウトプット1. と2. に直結する活動として、1）農家グループによる有機農産物（野菜・果樹）の生産・供給の強化及び、2）市場・販路の拡大に注力してゆくことを共有しました。



PMU 会議参加者による記念撮影

更に、午後は昨年のビニールハウス導入活動に参加した農家圃場を視察し、社会・経済条件が異なる中でのクリーン農業の推進に関わる認識を深め有

意義な機会となりました。なお、PMU 会議の様子はサイヤブリ県の地方ニュースで取り上げられ報道されました。



視察したナーラオ村の農家圃場

新専門家の赴任挨拶

営農指導 廣中 進司

初めまして、2020年11月からラオスに赴任しております廣中進司と申します。この度、「クリーン農業開発プロジェクト」の営農指導専門家として派遣されることになりました。これまで沖縄県農業試験場園芸支場で研究技師、沖縄県農業協同組合で営農指導、JICA 青年海外協力隊（エチオピア）で農業協同組合改善、JICA 農業・農村開発部（現経済開発部）でジュニア専門員としてインドネシア・東ティモールの技術協力プロジェクトの案件担当、東ティモール「国産米の生産強化による農家世帯所得向上プロジェクト」で農産物流通・販売専門家の業務経験を積んで参りました。

本プロジェクトでは有機農業を推進しており、化成肥料に頼らない栽培技術、及び農薬に頼らない病害虫防除の確立が鍵であり、安全・安心な農産物生産が行えるよう現地で入手可能な資材を用いた有

機肥料の製造並びに誘引効果や忌避効果の高い防除が必要となってきます。生産する側の健康及び消費する側の健康に配慮しつつ、農家所得の向上を常に意識した持続性のある技術移転を目指したいと思えます。



熱心にナーラオ村の現場視察を行う廣中専門家

0A 現場からの声

このコーナーでは、対象県で有機農業推進に尽力しているキーパーソンに焦点を当て、発信しています。今号ではビエンチャン市ドウアンプティー村にあるマームア・ファームを取り上げます。



マームア・ファーム
(農場主: マー・ムア
ソンダー氏)

マームア・ファームはビエンチャン市サイタニー郡ドウアンプティー村にあり、20ha以上の農地で主にパイナップルやランブータンといった果実を中心に生産しています。年間の販売額は約4億Kip(約456万円)に上ります。以前はパイナップルの売上げが大きかったのですが、パイナップルを販売する農家が増えてきたため、現在はランブータンの売上げが主になっています。

農場主であるマー氏は1990年代にハンガリーの

大学で農業に関する修士号を取得しました。その後、農林省畜水産局で勤務した経験もあります。1996年から農業をはじめ、モデル農家にも指定され、タイに有機農業を学びに行ったこともあります。もともと低農薬で農業を実践していましたが、ビエンチャン市でOAマーケットが開設されたのを契機に2007年に正式に有機農業メンバーの一員になりました。

マー氏の娘であるセンパチャン氏が積極的に新しいことに取り組み、新しい風を運んでいます。「OAマーケットでは、皆同じ野菜ばかりを販売していました。ラオス人が食べたことのないものを売りたいと思いました。」タイのYoutubeで紹介していた生食用のトウモロコシを見て、直接電話で連絡を行いました。タイ側も彼女の熱意に答えて、種子を供給すると同時に、タイのサラブリー県に彼女を受け入れて技術指導を行いました。生食用のトウモロコシは現在OAマーケットで販売されています。

消費者とはFacebookを通じて繋がっています。例えば、ある作物の30~40%はFacebookを通じて常連客が予約しています。常連客の顔を見たいので、近隣であれば送料なしで直接農産物を届けることもあります。

マー氏は将来的には娘夫婦に農場を任せて、自身は日本を含めた海外旅行に行きたいと思っています。娘のセンパチャン氏は果実を中心に生産していくことに変わりありませんが、グリーンハウスを増設して生食用のトウモロコシを増産する計画を持っています。



マー氏(左)とセンパチャン氏(右)

